

16【街の散策からの気づき発見】

碓神社とイヌグス

会員 K.T.

大落古利根川の遊歩道沿いに碓神社とイヌグスの巨木が鎮座している。説明看板によると、
「埼玉県指定天然記念物

碓神社のイヌグス

指定年月日昭和三十年(1955)十一月一日

『碓神社』と呼ばれている祠は、江戸時代に名主を努めた多田家の屋敷稲荷です。祠の脇に生育する巨木がイヌグスで、樹齢六百年余を数えます。かつては、高さ約十二メートルの巨木でしたが、昭和三十四年(1959)の台風で被害を受け、現在では、高さ七メートル、根回り約十メートルを測ります。

イヌグスは、和名をタブノキといい、主として中部地方以南の海岸地に多く自生している暖地性の常緑樹です。そのため「碓神社のイヌグス」は、イヌグスの生育の北限とされ、埼玉県でも珍しい樹木であることから、昭和三十年に県の天然記念物に指定されました。

平成三十年(2018)二月 春日部市教育委員会



市の説明によると、江戸時代の粕壁宿は、米や麦の集散地として栄え、古利根川を利用した舟運が行われていた。当時、このあたりは小高い丘があり、地域の人々からは「碓山」と呼ばれ、イヌグズの巨木が船着場の目印になっていた。ここには、舟の停泊や船荷の積卸場となっていた川の湊、下喜蔵河岸があったらしい。上喜蔵河岸は新町橋のたもとあたりにあった。「碓神社」は郷土史を調べている須賀氏の著書、「須賀芳郎 著『春日部の神社』」には記載されていない。多田家の屋敷稲荷という、ことだからなのだろう、と思う。

このイヌグズは、県指定天然記念物と指定された 1955 年から 600 年前を計算すると、1355 年、南北朝の時代、春日部氏一族が南北朝の戦乱にかかわっていた時代に根づいたこととなる。このイヌグズの種は、どのようにして北限のこの地にたどりついたのだろうか、と思う。多田家の「碓神社」の祠ができた江戸時代中期とは、一般的には 1690 年～1750 年頃になる。この時代は江戸幕府が安定し、農業・商業が発展して元禄文化(1688 年～1704 年)が開花していた時代である。碓山のイヌグスは、この頃には樹齢 345 年～395 年たっているの、巨木となっていたであろう。「船着き場の目印になっていた」、というのも納得がいく。

気がついたことは、「上喜蔵河岸」は現在も長方形に整形された石を積んだ「切り込みハギ」という工法による石垣が河岸跡地に残っているが、「下喜蔵河岸」付近にその石垣は見られず、イヌグスのみ残っている。

余談ながら、江戸時代の舟運交通は、利根川・江戸川がメイン航路になっていた。江戸川には関宿三河岸・西宝珠花・金杉・野田・流山・松戸・市川・行徳、の河岸が設けられていた。古利根川には下流の松伏に堰があり、農業用水用の松伏溜井が設けられており、江戸と直接に水路では繋がっていない。また、古利根川の水量は夏季の農業用水用の水が松伏で堰き止められるときは豊富だが、冬季になると水量が減る。大きな船の乗り入れはできなかったであろう。舟運には小型の船が使われていたらしい。粕壁宿の年貢米は6月～8月に古利根川を利用して、江戸川の金野井河岸へ回漕していた記録が、享保18年(1733)「村鑑書上ヶ帳・粕壁宿文書」に残されている。江戸時代は旧暦、現在の新暦では、6月下旬から10月上旬といった時期になる。この時期に大量の荷を運べる舟運は便利なため、舟が盛んに行きかっていたであろう、と思う。